



バッハの森通信

第 135 号
2017 年
4 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森



自分が生きる意味

各自が自分で考えることを

M 学園を巡って、日本中が大騒ぎをしています。私が注目したのは、「教育勅語」を暗唱させられる幼稚園児の姿でした。戦時中、小中学生だった私は朝礼のとき「教育勅語」を校長がうやうやしく拝読した姿をよく覚えています。勿論、全文、暗記させられました。残念ながら今は部分的にしか覚えていませんが、大人になったら「天皇陛下万歳」と叫んで戦死することに、何の疑いも持っていなかったことは覚えています。「教育勅語」が軍国少年を育成する教科書だったことは間違いありません。

* * *

「教育勅語」は、日本人の道德観を支えていた儒教の教えに国家神道の衣を着せた、明治政府の作文です。富国強兵により、天皇を中心とする近代国家を建設するため、全国民に“滅私奉公”させる規範が必要だったのです。当然、それなりの理由があって「教育勅語」体制が成立したわけですが、ここでその功罪を検証するつもりはありません。ただ、M 学園を応援していたと思われる現代日本の権力者たちが、「教育勅語」に憧れを抱いていることを危惧しているのです。

この人たちは、価値観の多様化を嫌い、「教育勅語」のような、たった一つの規範で全国民を統一したいと考えているようです。同様の方向が、道德教育の教科書選定に関する文科省の指導にも現れています。時代錯誤的な民族主義です。

さらに危惧すべきは、民族主義が、日本だけではなく、世界中で蔓延していることです。二度の大戦の空しい争いから学んだヨーロッパ人が、民族国家の枠を乗り越えて創設したヨーロッパ連合が、各地で起こる民族主義的ポピュリズムに圧倒されて、今や瓦解しそうです。新大統領の反知性的なポピュリズムが支配する超大国アメリカは、世界を混乱させています。ここにイスラム過激派を加えると、これらすべての人たちに共通する姿勢は、唯我独尊、自分の絶対化です。

* * *

このような状況下、最近、しきりに思い出すのは、すでに紹介したことがある、イエスと同時代のユダヤ人律法学者ヒレルの言葉です（『バッハの森通信』第 109 号、2010 年 10 月 20 日発行、巻頭言）。

もし私が私のために存在しないなら、
誰が私のために存在するのか？
しかし私が私自身のために存在しているなら、
私は何者なのか？

かつて私は、最初の問いかけは、「自分の命は自分で生きるのが定め。誰も代わって生きてくれない」と解釈しましたが、今は、それは一つの解釈であって、別の答えもあるのではないかと思えてきました。第二の問いかけについて、人によって回答は様々だ、とヒレルは最初から考えていたと思います。いずれにしても、「自分が生きる意味」に、一定の答えを与えるのではなく、各自が自由に考え、複数の回答がみつければそれでいいという姿勢です。ただ、この問いかけに答えるために必要な条件があります。それは、自分を絶対化しないこと、相対化した自分を客観的に見つめる理性的判断です。

これはまさにヘブライズム、すなわち、旧約聖書の言語であるヘブライ語でものごとを考える考え方で、何で突然ヘブライズムなのか、と驚く方がいるかもしれませんが、バッハの森のテーマであるキリスト教の教会音楽は、ヘブライズムの思想を、ヘレニズム、すなわちギリシャ的な芸術表現で音にした音楽として伝えられてきました。ですから、このような歴史を持つ教会音楽を学ぶ人は、意識していてもいなくても、自分が生きる意味を各自自由に考えるようになるはずで

実際、バッハの森には最小限のルールしかなく、入会も退会も出席も欠席も、すべてメンバー各自の判断にまかされています。ヘレニズムの美を追究するもよし、ヘブライズムの思想性に興味をもつもよし、両者を総合したバッハの面白さに惹かれればさらによし。何も押しつけません。各自の自由です。どなたのご参加も歓迎しております。（石田友雄）

過越祭と復活祭

生きる喜びを追求した人々

* このメディタツィオは、去る3月19日に開催した「創立記念コンサート・聖木曜日の教会音楽」で朗読されました。

古来、キリスト教徒は復活祭の前の一週間を聖週間（受難週）と定め、この間、イエス・キリストの受難と復活を記念する特別な礼拝を捧げてきました。特に「過越の三日間」と呼ばれる最後の3日間には、最後の晩餐、ゲッセマネの園の祈り、キリストの裁判、十字架、死と埋葬を想い、最後に徹夜して日曜日の日の出を待ち、日の出と共にキリストの復活を祝う習わしが守られてきました。

「最後の晩餐」のメッセージ

聖木曜日の最初の出来事は、「最後の晩餐」として広く知られている「過越」の正餐です。過越祭の始まりを伝える旧約聖書によると、昔、エジプトで奴隷にされ、過酷な労役に苦しんでいたヘブライ人たちがエジプトを逃げ出したとき、神のお告げに従って、一歳の雄の小羊を屠り、その血を家の入り口の柱と鴨居に塗りました。すると、その夜、エジプト中の家々を襲った死神が、小羊の血のしるしがある家だけは「過ぎ越し」たので、ヘブライ人は助かりました。こうしてエジプトを脱出できたヘブライ人は、モーセに率いられてシナイ山に向かい、そこで神と契約を結び、選民イスラエルになりました。それ以来、古代イスラエル人とその後継者であるユダヤ人は、民族の誕生を記念する祭りとして過越祭を祝ってきたのです。

このような歴史的言い伝えを背景に、「最後の晩餐」の物語は、重要なメッセージを象徴的に語っています。まずこれが過越の正餐であったことが大切です。次にイエスが葡萄酒の杯を弟子たちに与えた後、「この杯はお前たちのために流される私の血における新しい契約である」と告げたことに注目してください。これは、イエスが十字架で流す血が、過越の小羊の血に代わって人々を死から救うこと、またモーセを仲介者としてシナイ山で神と結んだ契約によって誕生した選民イスラエル／ユダヤ人に代わり、「新しい契約」による新しい選民として「キリスト教会」が成立したことを意味しているのです。

「復活祭の小羊」

「最後の晩餐」の後でイエスと弟子たちはゲッセマネの園に行きました。そこで受難が迫っていることを悟ったイエスは、「みこころなら、この杯を私から取り去ってください。しかし、私の思いではなく、あなたの思いが行われますように」と父なる神に必死で祈りました。このように、イエスが血の汗を流して神に祈っていたときに、少し離れた所で弟子たちは眠っていました。受難物語は、受難を覚悟して、与えられた使命を果たそうとする孤独なイエスと、イエスの受難を理解しない愚かな弟子たちの姿を対照的に描きます。これは、イエスの死後、復活したイエスと出会った弟子たちの目が突然開け、イエスがキリストであったことを勇敢に証言し始めたことを語る伏線になっています。復活したイエスと出会うということは、新しい人間になることを意味しているのです。

これらすべての状況を踏まえて、ルターは新約聖書をギリシャ語原典からドイツ語に翻訳する際に、「最後の晩餐」の「過越の小羊」を、日付けの順序を無視して「復活祭の小羊」（Osterlamm）と翻訳しました。「最後の晩餐」は木曜日、十字架と埋葬は金曜日、キリストの復活は日曜日早朝の出来事ですから、「最後の晩餐」はイエスの復活の3日、乃至は4日前にあったことです。しかしルターは、イエスが杯を弟子たちに与えて、「これは私の血における新しい契約である」と宣言したときに、過越の小羊はイエスに変わり、同時に過越祭は復活祭に変わったと理解したのでしょう。ちなみに、ギリシャ語とラテン語、それにラテン系言語のイタリア語、フランス語などは、ヘブライ語の「ペサハ」を音訳した「パスカ」「パスクア」「パーク」など同じ単語で、過越祭と復活祭を表します。ただしドイツ語、英語などは、過越祭と復活祭を別々の単語で表しますから、ルターが訳語「復活祭の小羊」（Osterlamm）に特別な意味を籠めたことは間違ありません。

小羊の婚宴

ここで、バッハの「マタイ受難曲」の序曲を思い出してください。まず重々しい同音を執拗に繰り返す低音により、悲しみに満ちた重い足取りを刻むオーケストラが、ローマの兵隊に連行され、十字架を背負ってヴィア・ドロロサをゴルゴタに向かうイエスの姿を描きます。すると、この悲しみの行列についてきたシオンとシオンの娘たちの対話が始まります。先ずシオンが「来てください、娘たち。私が嘆くのを助けてください。ご覧なさい」と呼びかけると娘たちが「誰を？」

と聞き、シオンが「花婿を。ご覧なさい、彼を」と答えます。娘たちが「どんな様子ですか？」と聞くと、シオンが「小羊のようなお姿です」と答えます。ここで「おお、神の小羊よ、罪なく十字架に屠られ」とコラールの歌声が聞こえてきます。シオンは教会、シオンの娘たちは信徒の群れ、コラールは信徒の祈りをそれぞれ表し、これを2組の合唱とオーケストラ、それにソプラノ・イン・リピエノで演奏する壮大な音楽です。

さて、十字架を背負って、ゴルゴタの刑場に曳かれて行くイエス・キリストを、シオンが「花婿」と呼び、その姿を「小羊のよう」と語りますが、これは初代教会以来伝えられてきたイエスを指す象徴的な表現です。例えば、新約聖書巻末の「ヨハネの黙示録」は、ローマ帝国の厳しい迫害を受けていたキリスト教徒が、世の終わりに救われる様子を、天上における小羊の婚宴で、小羊に娶られ、聖徒の正しい行為を意味する清い衣をまとった花嫁として描きます(19章6~9節)。これは、神とイスラエルの契約を夫婦の契りにたとえた旧約聖書の預言者たちに由来する表現です。ですから、キリストを「花婿」と呼ぶときに、キリストに愛された教会は、ただ愛されているのではありません。同時に教会がキリストを愛し、貞節を誓う「契約関係」でキリストと結ばれているのです。

コラール「イエスよ、私の喜びよ」

これから、コラール“Jesu, meine Freude”「イエスよ、私の喜びよ」を皆さんとご一緒に斉唱し、その後で、このコラールの各節の間に聖句を挿入したモテットの第1曲から第3曲を演奏します。コラール第1節、すなわち、モテット第1曲は、「イエスよ、私の喜びよ」と始まり、イエスを慕う強い思いを語った後、「神の小羊、私の花婿よ」と、「私」にとってイエスが「小羊」であり「花婿」であることを明らかにします。ですから、このコラールは、小羊の婚宴でイエスと契りを結んだ教会の告白に他なりません。事実、「あなたの他に、地上で私には／何ものも他により深く愛すものになりません」と、貞節の誓いをして第1節は締めくくられます。

コラール第2節、すなわち、モテット第3曲は、「花婿」の愛により「神の小羊」の役割を果たすイエスについて歌います。すなわち、イエスの庇護の下に、「私」はあらゆる敵、サタン、雷、稲妻、罪、陰府(ヨミ)の攻撃を受けても安全だ。なぜなら、イエスが常に「私」の側(カハラ)に立ち、庇ってくださいるから、と歌いますが、これはまさに花嫁「私」を愛す花婿の姿です。次に「陰府(ヨミ)」によって総括される敵、「死」に立ち向かうイエスは、神の小羊の役割を果たしてい

ます。自分の血によって死神の侵入を防いで人々の命を護った過越の小羊のように、彼は十字架の犠牲により一度死にましたが、死に打ち勝って復活し、命の勝利を果たした方だから、死の攻撃から「私」を護ることができると言うのです。

このようなコラール第1節と第2節の間に挿入されたモテット第2曲が、花婿イエスと契りを結んだ花嫁、すなわち教会の歩むべき姿を示します。先ず「イエス・キリストにある者たちに、永劫の罰は存在しない」と歌います。永劫の罰とは、死を意味し、要するにイエスと契りを結んだ者は死なない、と語っているのです。神の小羊、イエス・キリストに護られているからです。

続けて「イエス・キリストにある者たち」とは、「肉によらず、霊によって歩む者たちだ」と説明します。この「霊」は、モテット第10曲によれば、「イエスを死人たちより甦らせた方の霊」です。これに対して「肉によらず」の「肉」は、コラール第4節以下で、諸々の宝、空しい誉れ、世の営み、罪、高慢と虚飾、悪徳の生活などであることが、明らかにされます。霊は復活した命、肉は死を意味しています。

死に打ち勝った命の勝利

ここでもう一度「過越の小羊」と「イエスの復活」の意味について考えてみましょう。一度死んだイエスが死に打ち勝って復活した、という説明は確かに神秘的な表現です。同様に、過越の小羊の血が死神の侵入を防いだ、という言い伝えも超常現象の報告に違いありません。しかし、実際に何が起こったか、ということ詮索しても余り意味がないのです。むしろ「過越の小羊」と「復活したイエス」が歴史に与えたインパクトとその結果に注目すべきです。「過越の小羊」の奇跡によって、それまでエジプト人の奴隷だったヘブライ人が、エジプトから脱出することができました。それから彼らはモーセに率いられてシナイ山に行き、神と契約を結んで選民イスラエル／ユダヤ人になり、その後1000数百年の選民の歴史を「旧約聖書」にまとめました。

「復活したイエス」は、ナザレのイエスの活動と教え、それに彼の十字架上の死に感動した弟子たちが、過越の小羊の犠牲、エジプト脱出、シナイ契約による選民の誕生という伝承を下敷きに、キリストの死と復活、罪からの脱出、新しい契約による教会を生み出す起点となりました。そして初代キリスト教徒は、イエスが神の独り子、キリストであると信じ、その論証活動を「新約聖書」にまとめたのです。「過越の小羊」と「復活したイエス」に共通するテーマは、命が死に打ち勝つためには、他の命を生かすために一つの命が

死ななければならない、という原理です。これは自然の摂理であり、自然界では自然に行われていることなのですが、人間は常に強い者勝ち、弱肉強食の世界を追求する結果、遂には自分自身も滅ぼしてしまう歴史を繰り返してきました。イエスは、それを指摘し、永遠に生きる命とは、自ら死んで他の命を生かす命、すなわち復活した命だ、という真理を示したのです。

このようなイエスの生き方に感動した人々の伝統の流れの中で、モテット「イエスよ、私の喜びよ」“*Jesu, meine Freude*”も作曲されました。ですから、「イエスよ、私の喜びよ」というテーマのメッセージは、「イエスよ、あなたを私は私の喜びにします」という告白に他なりません。

* * *

過越の小羊から、イエスの受難と復活を経て、30年戦争で疲弊した17世紀のドイツで作詞作曲されたコラール「イエスよ、私の喜びよ」まで、約3000年にわたる伝承の歴史をたどりましたが、これらの伝承や歌を造り出した人々には共通点があります。迫害さ

れたり戦争に巻き込まれたりして、皆、命の危険にさらされていたということです。それにもかかわらず、彼らは命の尊さと生きる喜びを追求し続けた人々でした。

では、今、私たちが生きている21世紀の世界はどうでしょうか。現在、日本は世界で最も安全な国のひとつなので、普段、私たちは余りにも気楽に暮らしているようです。しかし、世界各地から送られてくるニュースは、中東を始め各地で起こる紛争、テロ、飢餓、難民、貧困などのため、多くの人々が死に、辛うじて命をつないでいることを知らせてきます。しかも、世界中で、自分さえ良ければ他人はどうでも構わないという自己防衛的、排他的姿勢が露骨に表面化してきました。その行き着く先は核戦争も辞さないと言う乱暴な言葉になります。間違いなく人類は自滅に向かっていきます。

しかし、歴史を学ぶと、かつて同じように危機的だったことが分かります。それでも生きる喜びを探し求めることをあきらめない人々がいたのです。私たちも、その思いが籠められた歌を、彼らと一緒に歌ってみませんか。生きる勇気が与えられることを願って。
(石田友雄)

REPORT／リポート／報告

難曲に立ち向かおう

平安に生き生きと

* 創立記念コンサートでクワイアを指揮した比留間恵さんと、今回は聴く側で参加した安積源也さんから、次のような感想をいただきました。

「聖木曜日の教会音楽」と題された今年の創立記念コンサート。前半は、過越（ルターは敢えて復活祭と訳す）の晩餐からイエスの逮捕までを描く音楽が、聖書の朗読によって語られる受難物語に沿って、オルガン、合唱、声楽アンサンブルで奏でられました。メデイタツィオの朗読をはさんで、後半はコラール“*Jesu, meine Freude*”「イエスよ、私の喜びよ」がテーマとなり、クワイアが、J. S. バッハのモテット（BWV 227）から第1～3曲を歌い、最後はオルガンが、大曲“*O Lamm Gottes, unschuldig*”「おお、神の小羊、罪なく」（BWV 656）を演奏して立派に締めくくってくださいました。

今回、コンサートのプログラムの表紙を飾った絵は、

あのダ・ヴィンチの「最後の晩餐」でした。落ち着いた様子で12弟子に対し、静かに両手を広げたイエスが強い印象を与えます。“*Jesu, meine Freude*”「イエスよ、私の喜びよ」を学び、私には、この絵のイエスが、「あなたがたに何が起ころうとも、私が側にいるから安心なさい」と語っているように見えました。

このバッハの名曲“*Jesu, meine Freude*”「イエスよ、私の喜びよ」というモテットは、大変難しい曲です。重層的な含意の歌詞は、掘っても掘っても掘り尽くせない地層のようです。音楽も、協和音であれ、不協和音であれ、唸り合わないように澄んだ響きを求めるのは至難の業です。本番のときの私の心境は、迫る来る受難を予感しながら、ゲッセマネの園で祈ったイエスと一緒に「父よ、御心ならこの杯を私から取り去ってください」と言いたくなるほどでした。そのような中、プログラム表紙の絵が私に語りかけてきた言葉は、まさに“*mir steht Jesus bei*”「イエスは私の側にいる」（コラール第2節、モテット第3曲）でした。・・・だから安心しよう。

今回はモテットの第1～3曲のみ演奏しましたが、あと8曲あります。この8曲も、これから1年かけて歌っていきます。困難に立ち向かいながら、平安に、生き生きと歌えるように。（比留間恵）

ここでしか聴けない響き

胸が熱くなった 創立記念コンサート

長らくクワイアの一員として参加してきたコンサートに、久しぶりに聴衆の一人として参加させていただきました。今回は、あれから2週間たった今も印象に残り続けていることから、二、三、感想を綴らせていただきます。

今の時代、“シンプル”で“時間をかけず”に“すぐ分かる”、結果的に“刺激的”なものが氾濫していると感じます。バッハの森の活動は、その真逆なのです。しかし、長年（初めてバッハの森を訪れてから22年になります）バッハの森の活動に参加していると、続けるほどに、それが“ゾクゾク”するほど楽しいことを実感します。

さらに、それが決して内輪の楽しみで終わっておらず、“音楽”の次元でも、確実に意味のある営みにつながっていることを、今回、聴き手に専念することで実感しました。たとえば、クワイアでは毎週の活動の中で、一つの楽曲を歌う練習をするだけではなく、歌詞のテキストを読み込み、その意味の背景を学び、自分とは違う価値観のユニークな本質に触れ、可能な限り共感してみることに、時間と労力と楽しみを重ねてきています。そういった積み重ねが実際の演奏に現れてくることを、今回のコンサートで聴く側に身を置くことで実感しました。ですから、“**Jesu, meine Freude**”とクワイアが歌うと、一つ一つの言葉が聞き取れるだけではなく、その意味や内容も伝わってくるように聴こえてきました。言い換えると、曲の意味や内容にまで聴く側の想像力を膨らませてくれる合唱を、クワイアの仲間たちが造り上げていることに、胸が熱くなりました。

プログラムの半分を埋め尽くす、ルターが訳したドイツ語の聖書の文章と、それを訳した友雄先生の日本語の聖句朗読に圧倒されました。ルターが一言一言、ギリシャ語本文の意味を噛み砕き、ドイツ語に当てはめようとしたのと同じように、友雄先生も、ルターのドイツ語を一つ一つ噛み砕いてその意味を日本語に当てはめていこうとされたのだろうと想像しました。二千数百年前の詩人や預言者のうめきと、千数百年にわたる中世カトリック教会の伝統と、五百年前の宗教

改革者の息吹とが幾層にも重なり、それが現代のバッハの森の活動に連なっていることが感じられました。バッハの森の活動は、異文化の日本に身を置きながら、

ルターを通じてバッハが紡いできた教会音楽を継承しているのです。教会音楽が、このような歴史的な広

がりと文化的な重層性を持っていることを、一つのプログラムの中で体感できる場所は、そうそうないのではないのでしょうか。そして、改めてアーレント・オルガンの響きに感動しました。鈴木由帆さんの端正な演奏と素晴らしく練られたストップ選びに、アーレント・オルガンの魅力が存分に現わされた素晴らしい演奏でした。このアーレント・オルガンに象徴されているように、バッハの森の魅力は、「ここでしか聴けない響きがある」ことだと思います。その響きを味わうことができたひと時でした。

遠方に住んでいるため、なかなかこの活動に参加できないもどかしさを覚えています。それでも、訪れればいつでもバッハの森の世界に迎え入れてくれる、そんな温かさを、改めて感じる事ができたコンサートでした。（安積源也）

日誌 (2017. 1. 1~3. 31)

1. 7 **大掃除** 参加者 10 名。
1. 12, 19, 26 **運営委員会** 参加者各 4 名。
1. 13~3. 19 **春のシーズン**
1. 14 **話し合い** バロック・アンサンブルの春のシーズンのプログラムについて。参加者 8 名。
2. 2, 9, 23 **運営委員会** 参加者各 4 名。
2. 3~17 **入院** 石田友雄理事長、心労ブロック治療のため。
3. 2, 9, 16, 23, 30 **運営委員会** 参加者各 4 名。
3. 18 **オルガン調整**。河内克彦氏。
3. 19 **創立記念コンサート** 参加者 39 名。
3. 20~24 **オルガン修理** ロビー・ローソン氏、クリス・ボノ氏 (テイラー & ブーディー・オルガン工房)、河内克彦氏。
3. 22 **ハンドベル・デモンストレーション** 茨城 YMCA 東新井センターにて (別所香苗氏、當眞容子氏)。
3. 25~27 **録音** オルガン: 宮本とも子氏。
録音: 小島幸雄氏、川波惇氏 (有・コジマ録音)。
3. 20~4. 6 **春期休館**

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究
コラールとカンタータ (JSB)

1. 14 新年祭のカンタータ「イエスよ、さあ、讚美を受けてください」(BWV 41); コラール「主よ、誉めまつる」。オルガン:
J. S. バッハ「栄光はあなただけのものです」(BWV 41/6)、當眞容子。参加者 12 名。
1. 21 第 413 回、オルガン: J. S. バッハ「栄光はあなただけのものです」(BWV 41/6)、當眞容子。参加者 10 名。
1. 28 顕現祭後第 4 主日のカンタータ「神が、この時、私たちと共におられなかったら」(BWV 14); コラール「御神この時に」。オルガン:
J. S. バッハ「御神に讚美と感謝あれ」(BWV 14/5)、笠間きよ子。参加者 13 名。
2. 18 第 414 回、オルガン: J. G. ヴァルター「神がこの時、私たちと共におられなかったら」、笠間きよ子。参加者 10 名。
2. 25 六旬節のカンタータ「ちょうど雨と雪が天から降り」(BWV 18); コラール「アダム、罪に墮ち」。オルガン: J. S. バッハ「私は願う、

おお主よ、心の底より」(BWV 18/5)、安西文子。参加者 11 名。

3. 4 第 415 回、オルガン: J. S. バッハ「アダムの贖罪により全く腐敗した」、安西文子。参加者 17 名。
3. 11 第 416 回、エストミヒのカンタータ「イエスは 12 弟子を呼び寄せて言われた」(BWV 22); コラール「主なるキリスト」。オルガン: H. シャイデマン「主なるキリスト、神のただ独りの御子は」、金谷尚美。参加者 12 名。

学習コース

バッハの森・クワイア (混声合唱) 1. 14/15 名、
1. 21/18 名、1. 28/17 名、2. 4/14 名、
2. 18/17 名、2. 25/17 名、3. 11/16 名、
3. 18 (ゲネプロ) /20 名。

バッハの森・ハンドベル・クワイア 1. 21/3 名、
1. 28/5 名、2. 4/4 名、2. 25/4 名、3. 11/4 名。

バッハの森・声楽アンサンブル 1. 21/4 名、
1. 28/7 名、2. 4/6 名、2. 25/6 名、

オルガン音楽研究会 1. 20 /8 名、2. 3/10 名、
3. 3/8 名、13. 17/7 名。

コラール研究会 1. 13/5 名、1. 27/6 名、
2. 24/6 名、3. 3/7 名。

クラヴィコード・オルガン教室 1. 2/2 名、
2. 3/3 名、3. 3/3 名。

オルガン・クラブ 1. 13/3 名、1. 27/3 名、
2. 10/3 名、2. 24/3 名。

読書会: 聖書 1. 14/6 名、1. 21/10 名、1. 28/9 名、
2. 25/9 名、3. 11/7 名。

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 1. 6/2 名、
1. 10/2 名、1. 11/1 名、1. 12/2 名、
1. 13/1 名、1. 14/1 名、1. 17/1 名、1. 18/2 名、
1. 19 /2 名、1. 20/1 名、1. 21/1 名、
1. 24/1 名、1. 25/1 名、1. 26/2 名、1. 27/3 名、
1. 28/1 名、1. 31/2 名、2. 2/4 名、
2. 3/1 名、2. 4/2 名、2. 9/2 名、2. 10/2 名、
2. 14/2 名、2. 15/2 名、2. 16/1 名、
2. 17/3 名、2. 18/1 名、2. 21/1 名、2. 22/1 名、
2. 23/3 名、2. 24/3 名、2. 25/2 名、
2. 28/1 名、3. 1/3 名、3. 2/2 名、3. 3/1 名、
3. 4/1 名、3. 8/2 名、3. 10/2 名、
3. 11/2 名、3. 14/2 名、3. 15/1 名、3. 16/2 名、
3. 17/2 名、3. 18/1 名、3. 28/1 名、
3. 29/1 名、3. 31/1 名。